



天野進吾が視る。語る。今日のできごと。まつりごと。

ホームページを見てください <http://www.amano-shingo.info>

「Shinooka 春の芸術祭」を訪ねて

今年も静岡舞台芸術センター「SPAC」から県議員に恒例の「春の芸術祭」の案内状が送られてきました。

「参加」の返事を出しておりましたので、5月5日、家内と一人分の三、〇〇〇円を支払って舞台見物と洒落ました。

恐らく、舞台芸術センターといっても、ご存じない方が殆どでしょう、日本平の入り口近くの鬱蒼たる樹木の間を築かれた「芸術の砦」こそ、本県が自慢とする舞台芸術公園であります。その一角にある野外劇場がこの日の舞台であります。

厚い雲に覆われておりましたが、幸い雨の心配は無用、にも拘らず、舞台の入り口では一〇〇円ショップの商品らしい「ビニールの雨合羽」が配られました。

誰もが主催者側の優しい思いやりから配布されたものと解釈したでしょうが、空を見上げて、「大丈夫」と思い、この雨合羽を着ることもせず、舞台の前席に陣取ったお客さんが後に被る被害は、想定外の出来事でした。

この夜の出し物はシエクスピアの「マクベス」です、「億土点」という耳慣れない演出家による公演、しかも「利賀」グループの演出家の一員であれば、例によって「奇を衒う」出し物ではないかと想像しながら、冷たいコンクリートの座席に腰かけました。

「驚きました」率直に言って「あれが芸術、あれが演劇ですか」、舞台は恰も田植え前の田んぼのように「泥んこ」が敷き詰められ、主

役はもとより全員が泥まみれ、足を取られてひっくり返るなど演技に思えない「笑い」もありました。更に、「バーナムの森」に見立てた泥まみれの笹竹を、舞台一杯に振り回し、ために、前列の観客には泥の雨となって降りかかったのです。ここで初めて雨合羽の意味がよくわかりました。まさに想定外の出来事でした。

偶然、その会場で出会った家内の同級生は、早稲田小劇場時代から「アングラの演劇」を趣味とする東京の友人に誘われて、初めてSPACの舞台を見たとのことですが、彼女もまたホトホト呆れかえっておりました。

県民が利用できない芸術劇場

(財)静岡舞台芸術センターが開設されて11年、この間に一〇〇億円以上の県費が費やされてきましたが、残念ながら、殆どの県

民はこの「SPAC」の存在も、また県当局の「世界的」という折り紙つきの演出家、鈴木忠志氏の存在も知りません、否、一体どれ程の県民が、一般市民には使用させないSPAC専用の「野外劇場」やグランシップに併設された豪華な「芸術劇場」をご存知でしょうか。10年ほど前、鈴木忠志氏の論文のなかに、「舞台芸術に理解のない野蛮な議員は次の選挙で落とせばいい」と云う過激な文章がありました。率直に言って、これまで本会議の場で「舞台芸術」を取り上げ、真つ向から「批判」し「反対」してきたのは私だけでした。勿論、「賛同」している議員は皆無に近いと云えるでしょう、何故ならこの夜「マクベス」に足を運んだ議員はお節介な私だけだったようであります。

譬え私が「非文化人」の烙印を押されようとも、殆どの県民に理解されないこの舞台芸術は将に「妄想の虜」であります、もって莫大な県費を投ずる政策とは思えず、早急に、廃止する決断を願うものであります。

6月22日(金) 夏至の日 キャンドルナイトで地球に愛を

「地球温暖化」をよく耳にします。他人事になりがちなの現状に、今日日本で面白い運動が始まっています。

発信人はてんつくマン、「自分に何ができるか考えてみよう、やってみよう。微力だけれど無力ではないんだ。」いま、チームGOGOという名称で老若男女を巻き込んで広がってきています。夏至に向けて環境を考

える新聞が「号外」として配布されます。

具体的な試みとして夏至の日(6/22)は「電気をつけずろうそくで過ごす」をよびかけています。世界中では夏至と冬至の日には電気をつけずろうそくで過ごすという運動が高まっています。

6月22日はキャンドルナイトで大切な人と大切な話をして地球に優しいひと夜を過ごしましょう。

子育てサークル・静岡パワにこフレンドズ

七間町と呉服町

今年の七間町のゴールデンウィークは既に恒例となりつつあるブラジル・サンバのお祭りが狭隘な商店街を舞台に、華やかな飾り衣装と共に激しく踊り捲っておりました。

例えば、戦争の傷跡をあちこちに散見される昭和20年〜30年代、私達はその財布の厚みに関係なく、「街に行く」の共通語で一家揃って和氣藹々、薄暗い電灯の繁華街に向ったものでした。

「札の辻」は呉服町と七間町の分岐点にありますので、この時代の待合場所は「札の辻で会おう」が合言葉でした。そこで、今回は今一度この著名な二つの街の歴史を紐解いてみることにしました。

「札の辻」とは、時代劇などに屢々見られますが、所謂「おふれ」を張り出した場所を云い、人々が賑わう辻々に「お上」からのお触れを庶民に知らしめるための高札を立てた所であります。

「呉服町」は一六〇九年「慶長の町割り」によって誕生した町名であります。絹座、木綿座の長であった伴野宗善がこの地に住んでいた事から名付けられたと言われております。当時、呉服町は1〜6丁目まであり、土地柄、相当の呉服商が軒を連ねていたと思われれます。

静岡大火の後、区画整理が行われ、1〜3丁目を1丁目、4〜6丁目を2丁目に変更しました。なお呉服町の一角に許可された魚やの町「中魚町」があり、そこに住む魚店「半平」が発明した食品こそ例の「黒はんぺん」です、それ故、私達が幼い頃、「黒はんぺん」とは云わず、発明者の名前「はんべ」と呼称しておりました。

一寸一言 私の雑記帳から

何事も専門家にまかせた方が確かであるとの意味合いで「蛇の道は蛇」という言葉があります。

同様の趣旨で「餅屋は餅屋」という言葉も日常茶飯に使われておりますが、前者の「蛇の道」は何故かピンと来ません、恐らく同様の思いをしている方も少なくないでしょう、処が先日、「目から鱗」の解説書に出会いましたのでここに紹介しておきます。

実は「蛇」と「へび」は異なる種類であることからこの言葉が生まれたのであります。

魚には「出世魚」といって、成長するほどに「呼び名」が変わる魚があります。例えば鱒がそうです。生ま

前「はんべ」と呼称しておりました。「七間町」も「慶安の町割り」によって誕生した町名であります。この頃は米、魚、油などは特定業者の専売であり、この同業組合を「座」と呼び、7種類の「座」を称して「7座」と呼んでいました。「七間町」の名称はその7座の長が住んでいた所から「7軒町」と呼ばれたところからきております。嘗て読んだ歴史書には当時の道路幅は大変狭く、七間(13m)は無かったとのこと。

れたばかりの稚魚は「おぼこ」、少し成長して「いな」更に大きくなつて「ボラ」と呼ばれ、最後が「とど」つまり「とど」となつてその一生を終わります。

江戸時代の学者、本居宣長は「へび」の分類で「尋常なるを久知奈波、やや大なるを幣毘といい、更に大なるを宇波婆美、極めて大なるを蛇と云うなり」と説明しております、即ち、蛇もまた大きさによって呼称が異なっていたようです。即ち、恐ろしい大蛇の通る道も小さな蛇が知っているので、これを調べれば大蛇の通り道が自ずから解るといふ意味であります。西欧では「泥棒は泥棒に捕まえさせよ」との格言があり、趣旨は餅屋や蛇と同様であります。

彩時記

～衣替え今昔～

黒や紺の学生服から一斉に白い半袖シャツへ。衣替えの季節に、学生時代を思い出す方も多いことでしょう。衣替えのはじまりは平安時代。旧暦の4月1日と12月1日に、宮中行事として季節に応じた衣類や調度品を入れ替えていたようです。現在のように6月1日と10月1日が衣替えの日となったのは、明治時代から。

もともと、最近では学校や企業の制服が減り、エアコンの影響で夏でも長袖の洋服を着る機会が増え、衣替えの意識は薄れてきているようです。しかし、着物の世界では今でも季節ごとにしかりと決まりがあり、6月〜9月は単(ひとえ:裏地のない一枚仕立の着物)、10月から5月は袷(あわせ:裏のついた着物)を着るのがルールになっています。

暦どおりに冬物をきちんと片付け、夏には夏の服や着物を着る。季節感が薄らいでいる現代社会だからこそ、そんなけじめが必要かもしれませんね。

歴史講座のお知らせ

町内会の集会、サークル活動などに天野進吾を呼んでみませんか。嬉しいことに最近、グループや町内会などで『天野進吾』の歴史講座の要望が増えて参りました。

このSHINGO-SCOPEの郷土史が好評ですのでその現れかもしれません。どうぞ、お気軽にお声掛けください。